

田んぼダムで水害防げ

升設置し排水量を調節

豪雨などの浸水被害の対策に、小山市の思川西部土地改良区（松本益一理事長）が県内で初めて「田んぼダム」導入を決め、今秋から5年かけて1200畝で整備することになった。雨水を一時的に水田にためて、少しずつ排水することで洪水被害を軽減する取り組み。水田の排水口に升を設置するだけで、比較的安く整備できる。

小山で今秋から整備

小山市西部にある同改良区は、一昨年9月の関東・東北豪雨で河川や水路が氾濫した。水田は最大で水深1メートルも水がたまったままになった。その後、同改良区で環境学習などの指導をしているカウンセラーから田んぼダムの提案があり、組合員らで作る「思川西部農村環境保全会」を中心に検討を進めてきた。



実験用に設置された落水升。小さい穴の開いた板で仕切れられ、排水時一気に水が出ていかない構造になっている（小山市上国府塚で）

保全会では、田んぼダムの先進地、新潟県に視察に行くとともに研究。昨年5月から宇都宮大農学部の研究グループに委託し、田んぼダムの効果などを調査してもらった。

研究グループは、改良区内8か所に、水田から水路への排水量を調節する「落水升」を設置し、降雨時の水量の変化を調べた。その上で、コンピューター解析による河川の氾濫、洪水の被害予測を実施した。

その結果、与良川の流域に当たる改良区南側で効果が大きいことが分かった。50年に1度の降雨の場合、稲の生育に被害が出ると思われる水深30センチの状態が24時間続く水田が190畝から、田んぼダムによって111畝に減らすことができる。

また、田んぼダムの貯水容量は約34万トで、遊水地

やダムを建設するより何十倍も安価で済むという。保全会では南側区域の約1200畝で、水田の排水口に計3500基の落水升を設置していく。費用は約5000万円、国の多面的機能支払交付金制度を活用する。松本理事長は「もともと水田が持っている貯水機能を使い、農家の手間もそれほどかからない。完成までしっかり取り組んでいきたい」と話していた。